謹賀新年

日本工業大学 通信

NIPPON INSTITUTE OF TECHNOLOGY

第144号

編集・発行
日本工業大学
広報課
〒345-8501 埼玉県南埼玉郡宮代町学園台4-1
☎(0480)34−4111(代)

http://www.nit.ac.jp

平成19年（2007年）1月1日発行

年頭の辞

学園は第二世紀へ

学長　柳澤　章

２００７年、明けましておめでとうございます。学生諸君そして大学関係者の皆様は、新しい年をどのように迎えたでしょうか。

昨年の出来事を振り返ると、世の中の変化はまだまだ止まる所を知らないと言う感じです。身近なところでは携帯電話のナンバーポータビリティが日本でも導入され、各社の激しい競争が展開されました。サービスの充実、「顧客満足」の向上は、これからの世の流れでしょう。

製造業に関わる出来事を振り返れば、マンションでのエレベーター事故、湯沸かし器の事故等があり、自動車産業は好業績の一方でリコールが相次ぐなど、技術とともにそれに携わる人の倫理観の問題が浮かび上がった２００６年でした。

皆さんは、「２００７年問題」ということばを耳にしたことがあるでしょう。今年はまさに、その２００７年を迎えた訳です。技術において熟練し、仕事のノウハウを豊富に持った団塊世代の社員が60歳を迎えて定年退職するために、技術、ノウハウの伝承が途切れ、産業界の様々なシステムに支障が出てくるのではないか、という懸念であります。

まさに、この２００７年に本学園が１００周年を迎えます。１９０７年に、東京の文京区に東京工科学校が開学して以来、現場での高い実践力の習得を教育目標として、実工学を脈々と受け継いで、時代の求めに応えてきた学園の使命をあらたに感じざるを得ません。

２００７年の今日、エンジニアにあらためて求められているのは、現物、現実、現場に向き合って問題解決をしていく力です。これは「三現主義」といわれ、日本の製造業が強みとしてきた大きな特徴です。これが日本製品を世界ナンバーワンの品質にしてきたといえます。

技術を、工学を学んだ者が、求められる水準の技術力を発揮し、世界の日々の進歩に遅れることなくキャッチアップ、そしてリードしていくことが、日本社会全体の課題となっています。

本学では、「７つの工房によるカレッジマイスターの養成―体験的実工学教育―」に代表されるように、実践的な工学の学びを、全国の工学系大学のモデルとなるべくプログラムを実施し、多くの諸君が学んでいます。シミュレーションなどの仮想体験だけでよしとするのではなく、例えば、ミニ旋盤の製作をはじめ、実物と格闘しながら、生産現場での経験の豊富な実務教員の指導を受け、完成させていくという、本学園が長年培ってきた学びの姿であります。

学園が第二世紀へと向かうこのとき、本学の建学の精神にある、工学理論を生産現場の技術として活かしていくことのできるエンジニアが、社会に強く求められ、実工学を学ぶ中から育成されていくと確信しています。

本学園そして本学の使命が、日本という国の成り立ちを支えるものとしてますます重要となることを、１００周年を機に肝に銘じて、本学も前進していくことを誓い、学生諸君の今年の健闘を祈り、年頭の挨拶とします。

いよいよ100周年の年が明けた。各記念事業も滞りなく進行し、完璧な状態で記念式典の日を迎えられるよう、関係者一同、一層気を引き締めているところである。左は、無限を表す「メビウスの環」をモチーフとした100周年記念シンボルマーク。

学校法人 日本工業大学創立100周年

第2回

「本学卒業現職教員の集い」盛大に開催される

第２回本学卒業現職教員の集いを昨年12月3日（日）午後2時より、東京ガーデンパレスにて開催した（実行委員長・長谷部高章・本学付属東京工業高校教諭）。

現在、約千余名の本学卒業生が、全国の小学校・中学校・高等学校などで教職に就いているが、この会の目的は、全国の同窓の教員が集まり、各地区・学校の教育課題について意見交換を図り、交流を深めようというものである。

当日の現職教員の参加者は、関東地区の小・中・高等学校に勤務する60名、本学園からは、大川陽康理事長・柳澤章学長はじめ、渡辺副学長、部長・課長、学科主任、本学教職員40名が顔を揃えた。また、教職希望の学生やサークルの学生25名が加わり、以下のプログラムで会は進行した。

第1部　講演会「本田宗一郎から学んだモノづくりの極意」、講師　西嶋祐氏（元本田技研工業（株）工場長）

第2部　手話コンサート～日本工業大学の手話サークルとともに～シャンソン歌手　朝倉まみ氏

第3部　懇親会

西氏は、昭和29年から、本田宗一郎氏とともに歩んでこられたが、講演では、本田氏の教えを６つのキーワードに集約して示した。最も印象に残ったのは「白い作業服が示す安全思想」で、車の開発に携わる技術者は人の命を預かる大事な仕事をしているのだから、医者と同様に白衣を着るべしというもので、西氏は、ホンダの白いユニホームを着用して講演を進めた。講演は、具体的で分かり易く、技術・工業教育に携わる現職教員にとって、示唆に富むもので、よい研修の機会になったと好評であった。

コンサートは楽しいトークを交え、歌を通して手話を広める朝倉氏の熱意に胸を打たれた。本学手話サークル「Hand in Hand」との競演では、心温まる共和音が会場一杯に響き渡った。

懇親会では、卒業生と大学教職員との輪があちこちにでき、在学時代の思い出話や各地域・学校の教育事情などについて情報交換が行われていた。閉会後も別れを惜しみ歓談が続いていた。また、ジャズバンドサークル「Bark Jazz Passion」が協力出演し、会場を盛り上げた。

来年度は、学園創立百周年を記念して、平成19年12月1日（土）、東京ガーデンパレスにて開催する。案内は、日本工業大学通信に掲載するとともに、全国の現職教員に直接案内状を発送する。今回実施したアンケートもふまえ、充実した企画を考えているので、奮ってご参加いただきたい。

（工業教育研究所・教職教育センター）

左：講演会で語る西氏　右上：実行委員長・長谷部先生　右下・手話コンサート

本学を拠点校として、53の高校と協定を結ぶ

高大連携教育プロジェクト 始動!

（日本工大―工業系高校連携教育プロジェクト）

工業高校と本学との関係を更に強化するため、高大連携プロジェクト室を工業教育研究所内に設置。本年4月より、連携教育を実施する。

日本工業大学の建学理念を考えるとき、本学と工業高校の関係は、まさに一心同体、強く結びついた運命共同体である。

建学の精神を踏まえ、わが国の「工業力」「ものづくり力」を支える人材を養成することを目指す、本学の「実工学教育」をさらに進展させるためには、早期技術教育としての工業高校と、大学技術教育の連携をさらに深めなければならない。

これまでの本学と工業高校との40年にわたる密接な連携により、工業高校教師の本学への信頼も厚いものがある。本年度の本学の普通高校への推薦入学制度実施を機に、工業高校との結びつきを一層強化していくことがきわめて重要であると考える。

このような趣旨により、工業系高等学校と連携教育協定を結び、年間を通じて「出前授業」、「ものづくり教室」、さらに研究会の開催などを計画的に行い、工業高校との連携を強化するとともに、授業の発展的な内容を学びたいという生徒の希望に応えて、大学教育への動機付けに必要な連携型教育を実施する。

当面は拠点校として、東京都5校、埼玉県18校、茨城県5校、栃木県5校、群馬県5校、千葉県5校、長野県6校、福島県4校の53校と協定を結び、4月から連携教育を実施する予定である。

本プロジェクトを推進するため、工業教育研究所内に高大連携プロジェクト室を設置し、高等学校との連携の窓口にあたる。

（工業教育研究所長　原田昭）

日本工業大学　平成19年度入試日程

今回からセンター利用入試が導入されました

日本工業大学　工学部

●機械工学科　●電気電子工学科　●建築学科　●システム工学科　●情報工学科

	出願期間	試験日	試験内容	合格発表	入学手続締切
一般入試	1月 4日～ 1月27日	2月 3日 2月 4日 2月 5日 （受験日自由選択制）	・数学Ⅰ、Ⅱ　・物理Ⅰ ・英語Ⅰ、Ⅱ、リーディング、オーラル・コミュニケーションⅠ *上記のうちから2教科を選択	2月10日	2月19日
センター利用入試A	1月 4日～ 2月 3日	数学・理科・外国語の3教科14科目のうち2教科以上選択して、かつ1教科あたり1科目以上を選択、受験		2月10日	2月19日
センター利用入試B	2月19日～ 3月 2日			3月10日	3月19日
社会人入試	1月 4日～ 1月18日	2月 4日　面接（小論文を課したり、口頭試問をする場合もあります） 書類審査による第一次試験の合格者のみが受験可能。 第一次試験の合格発表日は1月20日		2月10日	2月19日
帰国子女入試	1月 4日～ 1月27日	2月 3日	書類審査及び面接	2月10日	2月19日
AO入試（第3期）	2月26日～ 3月10日	3月16日	課題への取り組み、面談	3月23日	3月28日

日本工業大学　大学院工学研究科　博士前期課程・博士後期課程

●機械工学専攻　●電気工学専攻　●建築学専攻　●システム工学専攻　●情報工学専攻

本学で先端技術研究の取り組みを

社会人大学院生　募集！（日本工業大学　社会人特別選抜）

■平成19年度　大学院　社会人特別選抜入試日程

	出願期間	試験日	試験内容	合格発表	入学手続締切
二次募集	2月14日～2月21日	2月28日	書類選考・面接	3月5日	3月13日

願書のご請求およびお問い合せ先：教務部教務課　大学院入試係　TEL：0480-33-7507（直通）

願書のご請求およびお問い合せ先

〒345-8501　埼玉県南埼玉郡宮代町学園台4-1　日本工業大学教務部　入試室

0120-250-267　TEL：0480-33-7676（直通）

URL：http://www.nit.ac.jp/　　E-mail：nyu-shi@nit.ac.jp

●年頭所感●

第二世紀へ更に飛躍を!

理事長
大川　陽康

本学はことし、学園創立百周年を迎えます。つまり本学は第二世紀に向って決意を新たにし、一層の飛躍へと進む年になるということです。

この記念すべき年の年頭に当り、私は日本の製造業を支えるものづくりを大切にしてきた本学に、誇りと自信を深めて、全学一丸となって近未来への輝かしい展望を描きたいと期待しております。

ご承知のように、我が国経済の根底を支えていたのは、世界に冠たるものづくり技術であり、そのものづくり技術を支えているのが本学のような工科系のものづくり型大学であります。この2～3年は、そうしたものづくり技術の中核を担っていた、いわゆる団塊の世代が世代交替期を迎えております。彼らの後を継ぎ、日本のものづくり技術をより強固で確固たるものとする使命と責任が本学のような工科系大学に課せられているのです。

昨年11月、工業技術博物館の鋳物に関する特別展の講演で、講師が次のように述べられました。

「日本の文化は伏見桃山時代からの伝統を持っており、その美と感性は現在の工業技術にも生きている。一方、ものづくりに対する技術的探究と執念は高度化し、革新を続けている。例えば鋳物でいえば、あの燃え易いマグネシウムを素材とする鋳物が押し出しで自動化できるところまで進歩した」。

私はこの例に見るように、一見困難や不可能に見える問題も、それに取組む技術者が不屈の信念と創造的発想をもって解決していけるものと考えています。私は研究生の頃、夕方研究室で指導教授からテーマに関する実験上のご指導を与えられ、翌日午前中には成果を尋ねられるという経験を何度もしました。徹夜してでも、エンジニアは日頃の蓄積と能力と感性で、成果を生み出せという教えだと痛感しました。

幸い本学は各学科の充実やカレッジマイスターへの取り組み、専門職大学院の更なる発展などを通して、私達が標榜する教育プリンシプルが大方の支持と評価を得ているものと確信しています。

本年は、各学科の教育内容の充実、整備だけでなく、産学連携体制づくりの強化、環境対応型の学園づくりの推進等、手綱をゆるめることなく、前進していきます。

願わくは、本学関係の全職員、全教員、全学生のみならず、後援会の皆様や卒業生諸君、さらに宮代町等の地域社会の方々の一層のご鞭撻をお願い致します。

専門職大学院だより

本大学院発のPR活動

大学院技術経営研究科
研究科長　村川　正夫

本専門職大学院の内容を外部発信するため、取り分けて潜在的入学希望者の方々に知っていただくため、ホームページ（HP）として本大学院の公式サイト（http//www.nit.ac.jp/senmon/）のほか、神田キャンパス発のMOTチャンネルも設けている。

前者では講義内容を示すシラバス、学年暦を含めて大学院の概要が分かるHPとなっている。後者では、もう少し具体的な情報発信を試みている。例えば教員からのメッセージであるとか、特定課題研究（必修科目）のアブストラクト掲載等である。このサイトは近江教授が担当になって昨年から立ち上げたものであるが、公式HPと共に本大学院の情報発信、PRの手段として充実させていきたい。

オープンキャンパス（OC）は有力PR手段であり、既に三回を実施済みである。本大学院が一年制であるため、本年度からは早くも第一期修了生も参加した在学生との合同パネルディスカッション「本大学院に学ぶ期待と実感を語る」のようなコーナーが実現しており、好評を博している。

PRの有力手段になるようにとの期待をこめて現在進行中の出版プロジェクトもある。佐久間教授が編集委員長となり進行しているもので、A5版250頁相当の『中小企業技術経営実践講座』を工学図書から発刊する。これは本大学院の教員が講義録をもとに執筆するもので、本大学院の授業内容を広く知ってもらおうとの企画意図がある。予定では、最後の第4回OC（2月10日開催）までに完成させ、参加者に無料で配布するほか、様々な機会にPRメディアとして活用したいと考えている。

その他、OCの機会以外にも授業が一般公開されている科目に春・秋学期に開講の特別科目「意思決定と実施戦略」（元気な中小企業の経営者による講演）があることを付言しておこう。これらのPR手段により、来年度も多くの入学者を迎えられることを期待したい。

2007年度 専門職大学院オープンキャンパス日程

2月10日（土） 13時30分から
シンポジウム、説明会、キャンパスツアー、授業見学等を予定しています。
＊開催日の1週間前迄に予めお申し込みください。
お申し込み先：日本工業大学　専門職大学院
TEL：03-3511-7591　FAX：03-3511-7594
E-mail：mot@kanda.nit.ac.jp

2007年度 専門職大学院入試日程

	第2回募集	第3回募集
出願期間	平成18年12/25（月）～平成19年 1/30（火）	平成19年 2/ 5（月）～平成19年 2/28（水）
試験日	平成19年 2/ 3（土）	平成19年 3/ 4（日）
合格発表	平成19年 2/ 8（木）	平成19年 3/ 8（木）
入学手続締切日	平成19年 2/20（火）	平成19年 3/17（土）

埼玉りそな銀行と産学連携協力に関する覚書締結

6月に開催された産学交流セミナーで講演する原副学長

本学と埼玉りそな銀行（川田憲治社長）は、地域経済・社会の発展に寄与すべく、昨年11月15日「産学連携協力に関する覚書」を締結した。セミナー開催、共同研究、受託研究、インターンシップ等で相互協力を行っていく。

本学ではかねてから産学連携に力を入れているが、昨年4月に「産学リエゾンセンター」を発展的に改組し「産学連携起業教育センター」を開設、企業訪問等、積極的に産学連携を推進している。締結に先立ち、同行とは昨年6月に、本学学友会館で産学交流セミナーを開催。製造業を中心に同行の取引先企業75社以上が参加し、本学研究施設の見学、産学連携事例の紹介、交流会を行った。セミナー終了後、参加企業の40社以上から、技術相談等が寄せられ、同センターで個別に企業訪問し対応している。

本覚書の締結により同行との連携を更に密にし、本学の持つ研究成果やノウハウ等を、県内企業に広く紹介し、地域社会に積極的に還元していく。

ISO 14001

学内部門別実地調査
施設等使用状況調査の実施

教育・研究環境の向上および教育・研究活動の更なる発展に資することを目的に、マネジメントシステム（PDCA）を適用した教育・研究施設等の効率的・効果的な利用を図る取組みが始まった。施設使用の現況を把握し課題を抽出するため、現在までに機械工学系部門、建築学系部門等の研究室・実験室等全施設について実地調査を行った。

実地調査の概要

【調査実施者】学長、副学長、教務部長、総務部長、財務部長【立会者】環境推進責任者・主任担当者および各施設の使用責任者

【調査の着眼点】①施設・機器の使用目的、利用状況②不要な機器の保管③5S（整理、整頓、清掃、清潔、躾）④安全配慮の状況他

■機械工学系部門等

第1回（平成18年7月20日）＊161施設を実査、内53施設に改善を指示

第2回（平成18年11月1日）53施設を実査（是正処置の有効性を確認）、内14施設に再度改善を指示

■建築学系部門等

第1回（平成18年10月25日）129施設を実査、内42施設に改善を指示

＊研究室、実験室を1施設単位とする

抽出された課題の改善を進めるとともに、今後、全学的に取組みを展開し、継続的改善による教育・研究環境の向上を図っていく。

ISO-6年度環境目標達成状況

2005年10月～2006年9月

Clean Green Eco-Campus

～ISO-7年度の活動に向けて～

ISO－6年度は、教職員・学内関連会社・学生が一体となった環境マネジメント活動により、環境目標15項目中12項目で目標を達成している（下表参照）。

今年度、ISO－7年度には、その成果を継続、発展させるとともに、さらに、環境における社会的責任を認識し、工業教育の理想を追求する本学の教育環境の中で、環境教育・研究の一層の進展を掲げ、具体的目標の達成に向かって活動を推進していく。

以下に、平成17年10月からスタートし、平成18年9月迄のISO－6年度の活動の一端を紹介する。

■環境特別講演会の開催

①「地球環境時代の情報システム産業」（1／13）講師・黒田聡氏（情報システムエンジニアリング代表取締役兼COO）来場者数約200人

②「日本経済は復活したか」（4／21）講師・杉浦哲郎氏（みずほ総合研究所常務執行役員）来場者数約200人

■北海道工業大学・環境特別講演会における講演

（9／13）演題「日本工業大学の環境への取り組み」、講師・藤田則夫（総務部長・環境管理責任者）

大野丈雄氏（JACO）による「環境マネジメント」の授業

■「2006・NEW環境展」への出展（5／23～26）研究発表～自然エネルギー創出への挑戦～「メタン発酵消化汚泥の有効利用と環境教育用メタン発酵装置」「新しい書き換え媒体の研究」「太陽電池・燃料電池電気自動車」会場・東京ビッグサイト、来場者数15万人

■キャンパスのエコ・ミュージアム化の推進（新設）

①高力ボルトジベル接合②太陽等のエネルギーで湖水を循環させる潜水ロボ③液体製品用容器④仮想ネットワークシステム⑤人間乗車形スターリングエンジン

■学生環境推進委員会の活動

①スチューデントセンターにてリサイクルショップ開催。生活用品104点を展示（4／2～3）

②学生環境推進委員会主催講演会開催（6／30）演題「エコとエゴ」、講師・八木田浩史（システム工学科教授）出席者数約50名

③JACO大野丈雄講師による内部環境監査員養成研修開催（9／25～26）

■ISO－6年度　環境目標の達成状況／2005年10月～2006年9月　（評価）○…達成、×…未達成

	項　目	目　標	主要実績	評価
1	環境関連科目の充実	授業を通して学生の環境意識の向上を図る	環境関連科目43科目を通じ、延べ8,270名に実施（前年度比510名増加）	○
2	環境共生に関する研究の進展	・研究成果の環境マネジメント活動への反映 ・研究の進展と成果を共同研究に結びつける ・研究論文を学会等で発表し、国内外で認知させる	環境関連研究の推進（「年次要覧」参照） 「環境分野研究奨励助成金」採択研究の推進 NITEC等を通じた共同研究、ヒートアイランド研究	○
3	環境関連情報の発信と啓発	講演会、公開講座、シンポジウムなどを計画、開催し、環境共生意識の啓発・普及を図る	環境特別講演会（4回）、シンポジウム開催（1回） 「2006NEW環境展」出展、N.I.T.エコロジープレスNO.6発刊、外郭団体での講演他	○
4	EMS教育の推進	・教職員及び学生の環境意識の向上を図る ・教職員の内部環境監査員養成セミナー受講率50%以上	・教育訓練、講習会の実施、外部研修会への参加 ・50.4%（修了者123名）、学生の修了者は通算179名修了	○
5	学生EMSとの連携	EMSの環境管理活動を企画・実践する学生環境推進委員会への支援	学園祭への参加、講演会、リサイクルショップの開催、Kids ISOへの参加	○
6	体験的環境教育の推進（キャンパスのエコ・ミュージアム化の推進）	環境施設、研究成果等が環境へ及ぼす影響が目に見えるキャンパスを創造し、体感による環境意識の向上、環境教育を推進する	対象施設の整備、説明板の設置（5研究・施設）	○
7	電力使用量の削減	予想使用量の1%削減	予想使用量の1.7%増加	×
8	ガス使用量の削減	予想使用量の1%削減	予想使用量を6.9%増加	×
9	上水使用量の削減	予想使用量の1%削減	予想使用量を4.4%削減	○
10	紙使用量の削減	予想使用量の1%削減	予想使用量を8.5%削減	○
11	廃棄物の削減・適正管理	予想排出量の1%減量化、一般廃棄物の資源化率60%以上	予想排出量を32.3%増加、資源化率54.6%	×
12	緑地整備・保全	長期計画に基づく整備・保全	学園創立100周年に向けたグランドデザインの検討、緑地の維持、整備等	○
13	グリーン調達の積極的な推進	グリーン調達率の向上（関連会社からの購入品調達率50%以上）	グリーン調達率50.0%（金額ベース）	○
14	化学物質・廃液の適正管理	安全性向上へ向けての問題点の抽出	講習会、保有管理量の調査実施、化学物質取扱い指針の作成他	○
15	大学業務の質の向上	業務効率の向上、改善	施設等使用状況調査、業務効率の向上への施策実施	○

後援会特別事業

「憩いのゾーン」完成

24時間開放し、飲食物の販売機が充実している「憩いのゾーン」

サービスセンター購買部の改装工事（コンビニ化）とダイニング新築工事（客席数100席）が、ほぼ完成した。コンビニ化で、学生のニーズに合った多様な商品を、一般コンビニ店より更に安く提供し、ダイニング部分の新築で自販機を利用した食事の24時間提供が可能となった。

本工事は、平成18・19年度後援会特別事業として昨年8月に着工したもので、今後は、第1食堂の焼きたてパンコーナーをコンビニ内に移設。同時に、テラスに屋根を設け、屋外での食事も可能とする。パンコーナーの移設で第1食堂のスペースが広がり、使い勝手も改善される。第1食堂～コンビニ～ダイニング～スチューデントセンター～クラブ棟～百年記念館と、学生達の生活の場に一連のつながりが出来、憩いの空間が格段と広がるであろう。

全国から139チームが参加

第10回スターリングテクノラリー開催

今年も11月17日（土）に本学で開催予定

上：ノーマルクラスに参加した本学付属の東京工業高校チーム
下左：今回から実施されたRCクラス　下右：人間乗車クラス

「第10回スターリングテクノラリー」が、本学を会場に11月18日（土）開催された。

スターリングエンジンは静かでクリーン、熱源を選ばない、という特徴があり「夢のエンジン」といわれている。本競技会は、青少年の工学に対する興味や関心の喚起と、スターリング機器関連技術の発展を目的として、毎年開催している。

競技は人間乗車、ノーマル、クーラなど7クラスに分かれて、自作スターリングエンジンの性能とアイデアを競った。今回から、無線で車両を操縦するRCクラスも行われた。時折、優秀な成績を出す車両があるとコースの周りに人々が集まり、熱心に観察する姿が見られた。

参加数は工業高校生を中心に全国から139チーム。遠く沖縄県からも高校生3チームがノーマルクラスに出場し、うち1チームが5位に入る健闘ぶりを見せた。本学付属の東京工業高校は2チームが完走した。

実行委員長の一色尚次氏（東工大名誉教授）は、「従来にはない燃料で動き、より効率に優れた、新しいスターリングエンジンに挑戦してほしい。この競技会も今回で10回目だが、ぜひ100回を目指したい！」と意欲的に語っていた。

学生自治会中央執行委員会委員長就任あいさつ

皆さんの意見を結集し、皆さんが目指す良い大学にしていきたい

建築学科3年　河又裕介
（栃木県立宇都宮工業高等学校出身）

明けましておめでとうございます。新年を迎え、皆さん希望に満ち溢れていると思います。

時がたつのは早いもので、入学して3年が過ぎようとしています。この3年間は、大変な中での充実感を感じられる日々でした。入学当初は「何かしらしよう」と漠然と考えていました。その時に一番ひかれたのが、今私が所属している中央執行委員会です。「自分が出来ることを一生懸命しよう」と心に決め、入った当時から今まで変わらぬ気持ちで活動してきました。このことが、私の中で一番大学生活を良いものにしたのだと、感じています。先代の委員長のもと様々な経験をさせて頂き、交流は大学外にまで広がり、「予想外」と言うほどの人脈が増えました。こんなに仲間ができたのも先代の委員長・先輩方のおかげで成長できたからだと思います。

私は中央執行委員会委員長に立候補すると決めてから、「自分に何が出来るのだろう」と考えてきました。そして、私は「みんなが大学生活を楽しく過ごせるように一生懸命やっていこう」と決めました。私には一人の人間としての考えしかありません。これでは何も出来ませんし、一人だけの考えでは大学は良くできません。ですが、皆さんの意見があればそれは私の力にもなり、皆さんが目指す良い大学になっていくと思うのです。その為なら私は喜んで皆さんのために活動していこうと思っています。そして、他の委員会のメンバーも私と同じ気持ちで活動していると思います。ですから、是非自治会に目を向けてみて下さい。

私にとってこの1年はとても大切なものになるでしょう。これから、たくさんの人と出会い、話し合って色々なことを学び発見していこうと思っています。

最後になりましたが、大学全体を良くしていくには皆さんの協力が必要不可欠です。これから、皆さんと共にキャンパスライフを楽しくし、良い思い出作りをしていきましょう。

近事片々

そろそろ就職活動を始める方々もおられると思いますが、私の学校生活・就職先について、在学生のみなさんに向けてお話ししたいと思います。

最初に学生時代ですが、研究室は森田・上野研究室に所属し、森田先生のご指導を仰ぎました。森田先生の会社員時代の経験談やご指導は社会に出てからも役に立っています。また、森田研究室独自に就職ゼミやOB会を開き、就職に対する心構えやOBの方に直接会社の事や就職に対するアドバイスなどを聞ける機会を設けていただき、卒業後に役に立つ貴重な知識や・体験・経験を得ることが出来ました。

課外活動では、青森県人会・ナインボールサークル・学生環境推進委員会の3つを掛け持ち、忙しくも充実した学生生活をおくりました。特に学生環境推進委員会では、委員長を務め、人をリードする事の難しさやISO14001に関する知識、1つの企画を立ち上げ仲間と最後までやり遂げた時の達成感など、かけがえの無い非常に良い経験が出来ました。

次に就職したきっかけはアルバイトでした。アルバイトを4年間続け、そこで電気工事の基礎知識や現場で働く事の楽しさを知り知識をもっと深めたいと思い「財団法人関東電気保安協会」に就職しました。

皆さんは、TVコマーシャルなどで「関東電気保安協会」と言う社名を一度は耳にした事があるかと思います。この業務を行うためには、電気主任技術者の資格が必要になってきます。私はこの資格を持たないで協会に入ったため、電気主任技術者の資格を取得する事に苦労しました。仕事が終わった後や、休日など空き時間を見つけ勉強したのですが、勉強と仕事の両立がこれほど辛いのかと思い、一時は勉強を諦めかけましたが、「最後までやり遂げ合格する！」と心に決め、今年、試験に合格する事が出来ました。今後は知識・技術をさらに磨き一人前の技術者になれるよう努力していきたいと思います。

最後に在学生の皆さんに向けてですが、学生時代は勉強する事も大事ですが、勉強だけで無く、大いに遊んでほしいと思います。これから皆さんも就職してからわかると思うのですが、会社に入ると学生時代と違い自由な時間が大幅に少なくなります。勉強も遊びも全力で取り組む・・これが学生生活を一番エンジョイ出来るか出来ないかのポイントになると思います。

また、ほとんどの方は工業高校を卒業して日工大に入った方だと思われます。7年間も専門知識や技術を学んだ事は非常に大きな武器になります。その武器に気づき、その武器を使い未来を引っ張る素晴らしい技術者になれるように頑張ってください。

● 先輩だより ●

エンジョイ

宮川　雄統

（青森県立弘前工業高等学校出身）
電気電子工学科36期生
（財）関東電気保安協会

第38回若杉祭〈11月3日・4日・5日〉開催される

多彩な活動に彩られた3日間

第38回若杉祭が11月3日から5日まで開催された。会期中は、穏やかな秋晴れに恵まれ大学には多くの来場者があった。

今年のテーマは、『結～yui～』このテーマには、点と点を結ぶという意味があり、点は人々のことを表している。大学祭実行委員会委員長柴田直樹（建築学科3年）君は、オープニングセレモニーの挨拶で、たくさんの人たちと同じ気持ちを分かち合い、この若杉祭を成功させたいという思いを語ってくれた。

会期中は、3日（金）に第1回ビジネスプランコンテスト研修報告会、4日（土）に第7回ホームカミングデー、5日（日）には建築設計コンペ表彰式が行われた。ホームカミングデーに集まった卒業生には、懇親パーティで学生時代を思い出してもらった。

企画としては、2日目に「TALK & LIVE 2006」が行われた。今回のゲストは、吉川ひなの、江戸むらさき、タイムマシーン3号といった人気の芸能人。体育館は千人を超える観客の熱気と興奮で溢れた。

3日目の「秋のからっ風こんさぁと」では、人気急上昇のmihimaru GTが若杉祭を盛り上げた。mihimaru GT自体、ライブツアー真っ只中で、2ヶ月で12大学を回るという多忙ぶりだ。そんな彼女たちのパワフルな歌声に、アンコールの歓声が止まなかった。この日、野外ステージでは第1回New日工大美男子コンテストや紅白ゲーム合戦他の企画が行われた。

こうして今年度も若杉祭は大盛況のうちに幕を閉じた。

（学生支援課）

上左：建築コンペ表彰式　上中：模擬店（方言愛好会）　上右：ホームカミングデーで学内見学
下：ホームカミングデーで全員参加の記念撮影

● 工業技術博物館 ●

「東京が地場産業の金属製日用品」の特別展を開催

特別展会場の様子

工業技術博物館では、平成18年度の特別展『東京が地場産業の金属製日用品』を、11月3日から25日の会期で、当博物館後援会の協賛、東京都立産業技術研究センター、（財）素形材センターの後援を得て開催した。

テーマに沿った展示品として、アンティークな工業製品に造詣が深いエッセイストの末続堯氏から、明治から昭和中期にかけて東京下町で製造・販売され、大量に輸出されて外貨を稼いだ、アンチモニー製の日用品・土産品の貴重なコレクションを借用して展示した。

これらは伝統的な精密鋳造技術を駆使して造形されていることから、各種精密鋳造技術の紹介も付加し、前記両センターからロストワックス法などの精密鋳造法を解説するために実物模型や型を多数借用した。また、発泡スチロール製模型を砂型に埋没させ、溶湯金属を注ぐと模型が金属に置き換わる消失模型鋳造法のサンプルを野崎鋳造工業（株）と富和鋳造（株）から借用した。

最新の鋳物製品として、「JAPANブランド育成支援事業」のひとつとして川口市で企画され、最新鋳造技術を投入して造られた薄肉鉄鍋も展示した。さらに、本学付属東京工業高等学校で鋳造の教育用に製作された模型・鋳型（砂型）・製品や鋳物砂のサンプルも展示。金属の比重の違いを同形状の製品により体感できる体験コーナーも設けた。

このように、鋳造技術を系統的に展示・解説したことにより、最も古い金属造形技術であり、現在でも進歩し続ける鋳造技術が、親しみ易く、理解し易かったと、好評であった。

アンチモニー製の日用品（灰皿）

会期中の11月15日（水）には、学友会館のホールにて、講師に元日立金属（株）理事・素材研究所長の石原安興氏をお迎えし、『日本の工業製品を支える新しい鋳造技術』と題する特別講演会を開催、鋳造の変遷から最新の鋳造技術、今後の展望まで分かり易く解説していただいた。

「懐かしいお土産品」から「最新の鋳造技術」までバラエティーに富んだ展示と講演会で、非常に盛会であり、講演後に開催した懇親会では、末続氏や石原氏に熱心に質問をしている様子が印象的であった。

（学芸員・講師　丹治朗）

授業公開と授業評価
先生が先生の授業を見る

日本工業大学は、新たな100年に向けて、さまざまな教育改革に取り組み、施設や設備も充実させてきている。その中で、最も重要なのは、授業や実験実習の質を向上させることである。学生を、どこに出しても恥ずかしくない職業人・技術者として社会に送り出すには、日々の授業が充実していなければならない。

授業公開に参加する田中先生

学生による授業評価アンケートは、本学でもすでに実施している。成績評価の甘い授業が高い評価を得るのではと危惧する意見もあったが、学生はもっと真摯な態度で答えてくれ、自由記述欄の意見は、授業改善に大いに役立っている。

次は、教員の番である。大学教員は、他の教員の授業を見る機会も、見られる機会もほとんどなかった。他の教員の授業を評価するなど、思いもよらなかった。

そこで、教員がお互いの授業を参観し、評価するプロジェクトを、教務部と教育研究推進室が協力して実施した。

11月7日～27日の3週間、全教員が1科目ずつ授業を公開し、3科目を参観した。

参観教員からの報告書は、整理中だが、さまざまな発見があったようである。目に見えない現象を視覚化する努力や、美しく分かりやすいパワーポイントは、教員の熱意が学生に伝わり、活気ある授業となっている。

教壇からでは分かりづらい学生の反応を、肌で感じることもできた。話し方から服装まで、教員が緊張感を欠くと学生に伝染する。優れた授業は、教員も楽しそうだし、学生の目も輝いている。

そんな授業を増やす一助として、授業公開と教員の相互評価は、今後も、継続的に実施する予定である。

また、すべての報告書を公開する予定である。このような情報は、授業改善に積極的に役立てるべきであり、たとえマイナス情報であろうと、公開し共有する必要があると考えるからである。

（教育研究推進室長　波多野）

国際交流

中国・華中科技大学とタイのキングモンクット工学大学から来訪

11月10日、本学協定校の華中科技大学から李培根学長および6名の先生方が本学を訪問し、両大学間の学術および学生交流について協議を行った。翌日には悪天候の中、今後の具体的な交流計画を策定するため学内の施設を熱心に見学され、また協定に基づき同大学から本学に留学している学生とも懇談を行った。

また、11月17日にはキングモンクット工科大学トンブリ校（タイ）からSakKongsuwan工学部長以下7名の教員が本学を表敬訪問した。当学部長は初めての来学で、学内施設や、大学での授業風景などを熱心に見学された。また、歓迎パーティでは、今後も両校の更なる学術交流を図りたいと述べられるなど、両校の絆を更に深めることができた。

全員で記念撮影

キングモンクット大学工学部長と柳澤学長

「第16回全国産業教育フェア埼玉大会」開催される

11月10日（金）から12日（日）まで、さいたまスーパーアリーナ他で開催され、全国から12万人以上が訪れた。フェアは、専門高校生の学習成果の発表の場であるが、今年は中学校から大学・専門学校・企業も参加し、賑やかな祭典となった。本学園は、大学、付属中学・工業高校、専門学校の案内を配付、説明した。

また、小・中・高生を対象に開講したマイクロロボット工作教室は、整理券を配付するほどの盛況だった。展示ブースでは、機械工学科は、形状記憶合金ロボットハンドと二足歩行ロボットの実演、電気電子工学科は、エレベータ制御装置を模型で実演、システム工学科は、管内作業用のミニズ型ロボットを展示、情報工学科は、CPUの実習キット等を展示した。全国高等学校ロボット競技大会開会式に柳澤章学長が招待され出席、機械工学科中里裕一助教授が審査を担当した。また、全国高校生プログラミングコンテストでは、情報工学科丹羽次郎助教授が審査を担当した。フェアの様子は、本学のサーバを使いリアルタイムで全国に配信された。（工業教育研究所）

マイクロロボット工作教室

埼玉県東部地区大学単位互換制度

全学総合講座で渡辺教授、波多野教授が講義

単位互換制度とは、入学後に他大学の指定された開放科目を履修して修得した単位を、所属する大学の単位として認定する制度である。埼玉県東部地区大学単位互換協定は、本学と獨協大学、文教大学で締結していたものであるが、平成18年4月に埼玉県立大学が加わり、4大学となった。

この4大学の教員が一つのテーマに沿ってリレー方式で結ぶ4大学共通講座がこの秋学期（9／25～12／18）に全12回にわたって、獨協大学で開講された。

共通テーマは「さまざまな視点からのアート」で、本学からは建築学科の渡辺勝彦教授（副学長・教務部長）と波多野純教授（教育研究推進室長）が授業を担当した。

渡辺教授は「自然と建築」―日本のさまざまな空間美―（11／13）、「華やかさ寂しさ・剛さ柔らかさ」―空間のデザイン特性―（11／20）を、波多野教授は「もののの美しさ・人の優しさ」―生活の彩りと技術―（11／27）を講義した。学生達は、普段接したことの無い視点での授業に目を輝かせて熱心に聴講していた。

第13回教育改革シンポジウム
インフォキャンパスを活用した授業改善

IT環境の整備と活用は、大学教育の質を向上させるための重要な課題である。本学では、「インフォキャンパス」と呼ばれる授業支援システムを導入しているが、一部の教員の利用にとどまり、十分に活用されていない。そこで、授業改善ツールとして広く活用する第一歩となるよう、11月16日にシンポジウムを開催し、76名の教職員が参加した。

まず、石川孝教授（学生IT環境検討委員会委員長）が、授業計画のオンライン作成を手始めに、学習支援などへと利用を広げればよいと説明した。さらに、丹澤祥晃助教授（機械工学科）と佐藤杉弥講師（共通系物理）が、自らの活用事例を紹介し、教育効果について報告した。

討論では、対面授業の重要性を再確認した上で、新たなツールを使うことによって学生が自ら学べる機会を増やすことができるなど、ITによる教育改善の可能性が示された。

学長挨拶（11/16）

第14回教育改革シンポジウム
魅力ある大学つくりのために
～大学をとりまく状況と大学改革の実際～

大学全入の時代、積極的な改革を推進する以外に大学が生き残れる途はない。

学園創立100周年記念事業「学園21世紀若手懇談会」は、危機感の全学的共有を目指して、11月29日にシンポジウムを開催し、83名の教職員が参加した。

寺裏誠司氏（リクルート進学カンパニー）は、危機的状況を統計データで示し、本学は現場の技術者を養成してきた歴史を大切にすべきだと、講演した。

納屋健氏（駿台教育研究所）は、教職員全員が教育理念を共有し語れることが重要、学生の不満足度を調査し改善すべきなどと、講演した。

中里裕一助教授（懇談会実行委員長）は、金沢工業大学の積極的取り組みを紹介した。

最後に、上記3名と波多野純教授（教育研究推進室長）が、佐藤杉弥講師（懇談会実行副委員長）を司会に、パネルディスカッションを行った。

質疑応答の様子（11/29）

後援会新潟県支部
支部創立30周年記念式典挙行

11月18日（土）、本学厚生施設の「赤倉山荘」において、後援会新潟県支部創立30周年記念式典が盛大に開催された。同支部は現在全国に19ある支部の設立第1号として誕生。

当日は、星実行委員長（前支部長）の開会挨拶の後、柳澤学長、佐伯後援会会長から敬意と感謝を込めての祝辞が述べられた。その後、鏡開きの4斗樽をはじめ、持ち寄られた多くの地酒を酌み交わしながら、創立30周年の節目を祝った。

献血について

平成18年11月16日（木）、体育館前にて、赤十字血液センターによる本年度2回目の献血が実施された。（毎年春と秋の2回実施）今回も多くの学生、教職員が会場を訪れ献血に協力し、採血者の総数は207名。その内197名が400ml採血に協力した。

人事異動

【任用】（12月1日付）
◆山本好央事務職員（財務部用度・管財課）昭和32年5月9日生まれ。昭和55年3月東京国際大学商学部卒業。

（1月1日付）
◆足立真講師（建築学科）昭和45年12月13日生まれ。平成10年3月東京工業大学大学院理工学研究科建築学専攻博士後期課程単位取得満期退学。前東京工業大学大学院理工学研究科建築学専攻助手。博士（工学）

国外出張（10月～11月）

◆神林靖助教授（情報工学科）／出張先＝スペイン（10／4～9）／目的＝WWWインターネット国際会議における論文発表◆江藤香助手（情報技術センター）／出張先＝イギリス（10／7～13）／目的＝第10回知識ベース知的情報エンジニアリングシステム国際会議における研究発表◆鈴木清教授（システム工学科）／出張先＝米国（10／15～21）／目的＝第21回米国精密学会参加及び論文発表◆加藤重雄教授（システム工学科）／出張先＝米国（10／16～20）／目的＝アメリカ精密工学会21回年次大会における論文発表◆八木田浩史助教授（システム工学科）／出張先＝韓国（10／18～21）／目的＝第3回アジアDME会議における研究発表◆渡部修一教授（システム工学科）／出張先＝韓国（10／19～22）／目的＝第6回プラズマと薄膜技術に関する日韓シンポジウムにおける研究発表◆三好和壽教授（先端材料技術研究センター）／出張先＝台湾（10／25～29）／目的＝南台科技大学主催「ミクロ・ナノ材料及び製造技術」講演会における講演◆波多野純教授（建築学科）／出張先＝オランダ（10／26～11／3）／目的＝ライデン国立民族学博物館における町家模型の調査◆野口憲治助手（建築学科）／出張先＝オランダ（10／26～11／3）／目的＝ライデン国立民族学博物館における町家模型の調査◆古閑伸裕教授（機械工学科）／出張先＝タイ（10／30～11／6）／目的＝機関間協定に基づくKMUTT塑性加工研究グループとの共同研究打合せ及びタイ留学フェアにおける学生募集活動◆渡部修一教授（システム工学科）／出張先＝タイ（10／30～11／6）／目的＝機関間協定に基づくKMUTT塑性加工研究グループとの共同研究打合せ及びタイ留学フェアにおける学生募集活動◆渡辺康夫教授（電気電子工学科）／出張先＝シンガポール（10／31～11／5）／目的＝アンテナ・伝搬国際シンポジウムにおける論文発表◆伊藤庸一教授（建築学科）／出張先＝カンボジア（11／3～7）／目的＝カンボジアの風土と建築調査◆藤野充平教授（情報技術センター）／出張先＝フランス（11／5～12）／目的＝ECF2006研究発表会参加◆脇本隆之講師／出張先＝タイ（11／13～17）／目的＝電気学会放電・静止器・開閉保護・高電圧合同研究会における論文発表◆成田健一教授（建築学科）／出張先＝台湾（11／17～21）／目的＝提携校中国科技大学との大学間協定及び講演◆黒津高行教授（建築学科）／出張先＝台湾（11／17～21）／目的＝提携校中国科技大学との大学間協定及び21世紀の文化遺産保存国際会議における論文発表◆星野坦之教授（システム工学科）／出張先＝タイ（11／26～30）／目的＝第3回ホログラフィ・画像処理会議の運営及びチュラロンコン大学との研究打合せ◆船橋昭一教授（共通系）／出張先＝韓国（11／26～12／1）／目的＝韓国慶北大学理学研究所における集中講義◆黒澤明教授（教職教育センター）／出張先＝米国（11／27～12／4）／目的＝第4回日米音響学会ジョイントミーティング参加◆江藤香助手（情報技術センター）／出張先＝中国（11／30～12／4）／目的＝第14回教育におけるコンピュータの国際会議における研究発表

Town & Campus
「みやしろの顔づくりプロジェクト」

あけましておめでとうございます。新しい年が皆さんにとって実り多き一年となるよう、心からお祈り申し上げます。

今、宮代町では「みやしろの顔づくりプロジェクト」を立ち上げ、新たな町の魅力づくりに取り組んでいます。皆さんは、宮代町の「顔」と聞くと何を連想されるでしょうか。東武動物公園、日工大、進修館…。思うところは様々でしょう。しかし、宮代町には壮大な景観も、大規模な商業施設もありません。では、どんな魅力があれば人を引き付けられるのか…。ありきたりの仕掛けでは、周辺の観光スポットの中に埋没してしまいます。

そこで目を付けたのが、宮代町の「市民力」（市民＝宮代町のまちづくりに関わる全ての人）です。

市民参加のまちづくりで培われた市民力を生かして、活動と景観が一体となった新しい価値を創る。これが、「みやしろの顔づくりプロジェクト」が目指す魅力であり、町の顔なのです。

今年、このプロジェクト事業の第一弾として、進修館前広場と旧庁舎跡地がリニューアルします。多くの市民の英知が注がれたこの場所が、どんな景色に生まれ変わるか…。皆さんも是非楽しみにして下さいね。（職員K）

編集後記

▼2007年（平成19年）、明けましておめでとうございます。いつも十二支の話で恐縮ですが、本年は十二支の最後の「亥」の年です。「とざす・とじる」の意味で万物が枯れはて、生命力が種子の中に閉ざされた様子を表しているそうです。何か新年早々不吉さを感じますが、本年は、向こう見ずに猛然と突き進む「猪突猛進」スタイルで行動することも必要かも知れません。

▼また、2007年問題と言われる団塊の世代が大量に定年退職を迎え、退職金の増大、労働力不足（技術継承の危機）等が発生する社会問題や、特に私立大学は少子化により全入時代（入試において大学志願者数と定員数が同じ）に突入し、倒産する大学もと様々な問題が発生すると予測される年でもあります。健康に留意すること。そして、各人自律して、やるべきことを着実に行う年にしてもらいたいと思います。歳月の早さは滝のように落ちていくはずですから。（F）

◆環境配慮の観点から再生紙を使用しております。